岩手医科大学 医療

いわて医療通信 肝臓の疾患②

慢性B型肝炎の特徴

慢性B型肝炎とは、その名の通り、B型肝炎ウィルス(HBV)による慢性肝炎を指します。

HBVは感染した時期やその時の健康状態によって、一過性の感染に終わるもの(一過性感染)と、ほぼ生涯にわたり感染が継続するもの(持続感染)に大別されます。

多くの場合、3歳くらいまでの間に感染すると慢性肝炎(キャリア)になりやすく、思春期を過ぎると自己の免疫力が増強し、HBVを異物(病原物質)であると認識できるようになるため、リンパ球がHBVを体内から排除しようと攻撃を始めます。この時、リンパ球がHBVの感染した肝細胞も一緒に壊してしまうため、肝炎が起こり始めます。

一度感染してしまうと体から排除することが困難で、肝臓の中に一生残るのがHBVの特徴で、時としてこのウィルスが再び活動し、重い肝炎に進展する場合があります。これは、がんの化学療法や免疫抑制剤などの治療を行った場合に多く起こります。

思春期以降、一過性の肝炎を起こした後はそのまま一生、肝機能が安定したままの人がおよそ80~90%ですが、残りの10~20%の人は慢性肝炎へと移行し、その中から肝硬変、肝がんになる人も出てきます。以上のことから、感染防止が大切であると考えられています。そのため昨年から乳児全員にワクチンを接種することになりました。

B型肝炎は採血でHBVの抗原や抗体の存在を確認することで診断できます。治療の適応や方法は、肝臓の状態により異なりますので、かかりつけの医師と相談してください。

岩手医科大学は2017年
創立120周年を迎えます
IWATE MEDICAL UNIVERSITY 120th since 1897
城のあゆみ、未来へつなぐ
Iwate Medical University 岩手医科大学